

2008年6月22日公演の台本です。

原作：ガディウ

脚本・演出・監督：弥瑠璃

船長：+紫葵+（一次）

副船長：ヴィデット（一次）

子供B：+紫葵+（基本）

子供A：ティフォン・F（基本）

航海士：ティフォン・F（一次）

海軍大佐：セピア・クロウ（二次）

海兵A：れおら。（一次）

海兵B：グレール（一次）

シーン1・プロローグ（夜）

（子供B、舞台端で倒れている）

（子供A、舞台へ）

子供A「ちえ、船長といいオヤジといい・・・」

（舞台中をグルグル歩きまわる）

子供A「俺のどこが半人前だってんだ！」（/angry）

（子供A、舞台中央に座る）

子供A「航海術だってオヤジ以外にゃ負けねえし」

子供A「そろそろ任せてくれたっていいじゃねえか」

（子供A、古代のペンを投げる）

子供A「・・・ん？」（?エモ）

（子供A、一步子供Bの方向へ歩く）

子供A「こっちでなにか光ったような・・・」

子供A「これか？」

（子供A、ハルコネックレスを投げる）

子供A「・・・ネックレス・・・？」

子供A「！」

（子供A、ハルコネックレスを拾い、子供Bに駆け寄る）

子供A「お、おい??どうしたんだ!？」

子供A「おい・・・このネックレス、お前のか？」

子供B「・・・」

（子供A、おろおろと子供Bの前で右往左往）

子供A「・・・」

子供A「と、とにかく船長に・・・」

（子供A、子供Bを連れて舞台から退場）

（語り、舞台中央へ）

語り「これがひとりの若者と」

語り「後に、一つの海賊団を束ねる人物の出逢い」

語り「やがて8年の歳月が流れ」

語り「時は奇しくも、カバリア島浮上の年」

語り「彼らは、徐々に行動範囲を広げ」

語り「カバリア島のすぐそばまでやってきていました」

語り「これから、カバリア島を舞台に」

語り「彼らが繰り広げる物語を」

語り「皆様、どうぞお楽しみください」

語り「劇座Clap*Pot」

語り「『パイレーツ・オブ・カバリアン-Violet-』」

(舞台から退場)

シーン2・カバリア島上陸(朝～昼)

(コック帽の航海士、舞台へ、中央に座る)

航海士「よし・・・上出来だな」

(航海士、チキンなど色々な料理を投げる)

航海士「これなら、あの船長でもちったあ食うだろ」

航海士「・・・ったく、調べ物始めると」

航海士「すぐに船室にこもりやがる・・・」

(副船長、舞台へ、航海士のそばに立つ)

副船長「おや、おいしそうですね」

航海士「・・・ヴィデット」(引きつりエモ)

副船長「副船長、です」

航海士「・・・てめえ」

航海士「お前のじゃねえ、船長のメシだ！」

(航海士、ホネと魚の骨を投げる)

航海士「お前なんてこれでも食ってやがれ！」

副船長「はは、ご挨拶ですねえ」(笑いエモ)

航海士「・・・くそ、」

航海士「(何でコイツが副船長なんだよ・・・)」

(船長、走って舞台へ)

船長「碇をあげろ、帆を畳むんだ！」

副船長「おや？噂をすれば船長」

航海士「どうしたんだ？」

船長「早く、どこか陸地に停泊するんだ」

船長「・・・嵐が、来る」

航海士「嵐？・・・こんないい天気なのにか？」

船長「・・・ああ」

船長「海鳥たちが・・・騒ぎ出してる」

副船長「海鳥・・・ですか？」

航海士「まあ、船長が言うんなら・・・」

船長「ここから最も近いのは・・・あの島か」

船長「ティフォン！あの島に進路を」

航海士「島？」

航海士「・・・って、」

航海士「あそこは、カバリア島じゃないっすか！」

船長「カバリア・・・？」

船長「聞いたことのない島だな」

航海士「だめだめだめっ！」

航海士「あそこは最近、海軍の連中がうるついてんだ」

(船長、？エモ)

船長「海軍が、あんな孤島に？」

副船長「・・・なるほど、噂は本当でしたか」

(船長・航海士、？エモ)

副船長「ドン・カバリアという大富豪が」

副船長「自分の遺産をあの島に隠して逝去したとかで」

副船長「島で行われているゲームに優勝すると」

副船長「その莫大な遺産を得ることができるとか・・・」

航海士「はあ？」

船長「ゲーム・・・ねえ」

(航海士、一步船長に歩み寄る)

航海士「へ？お、おい船長・・・」

船長「この場所は、何かの古文書で見た記憶がある」

船長「ただの遊園地とは思えないな・・・」

航海士「・・・まさか」
船長「よし！」(電球エモ)
船長「そのゲーム、参加してみよう」
航海士「m j s k」(「まじすか」)
船長「僕はいつだって大マジさ」
副船長「まあ、あの島に行くというのは賛成ですね」
航海士「止めねえのかよ!!!」
副船長「あの島には、キナ臭い噂も聞きます」
航海士「・・・こいつら・・・」
船長「君は、残ってもいいんだよ? ティフォン」
副船長「そうですね、私と船長だけで行きますか?」
航海士「だーーーーっ!!!」
航海士「誰が行かないって言った!」
航海士「行くよ行けばいんだろこんちくしょー!」(/sad)
船長「じゃあ、決まりだね」
(船長、エモ、航海士、ぐしゃぐしゃエモ)
(船長・副船長・航海士、舞台からはける)

シーン3・海軍兵詰め所(昼)

(海兵B、舞台の中央で座る)
(海兵A、舞台へ)
海兵B「ん? やあ、れおら」
海兵B「見回りは終わったのか?」
海兵A「はいー」
(海兵A、海兵Bの前に座る)
海兵A「・・・あのー」
海兵B「どうかしたのか?」
(海兵B、?エモ)
海兵A「街で・・・」
海兵A「海賊船らしき船が」
海兵A「カバリア島に停泊したって・・・」
海兵B「なんだった!?」
(海兵B、立ち上がって驚きエモ)
海兵A「あ、あくまで噂ですよー」
海兵B「ああ、だが念の為」
海兵B「見回りの強化はした方がいいな」
海兵A「は、はいっ」
海兵B「しかし・・・海賊、かぁ」
(海兵B、落ち着きなく辺りをうろろうろ)
海兵A「グレールさんは・・・」
海兵B「ん?」
海兵A「雷迅の将・・・って」
海兵A「呼ばれた人、知ってますかー?」
海兵B「! ああ、知ってるとも」
海兵A「雷迅の将ヴィデット・・・」
海兵A「彼の指揮した部隊からは、」
海兵A「どんな大海賊も」
海兵A「けして逃れられない・・・」
海兵A「私・・・あの人に憧れて」
海兵A「海軍に入ったんですー」
海兵B「ああ、俺も彼が目標だったんだ」
海兵A「グレールさんもですかー?」
海兵A「えへへ、なんか嬉しいですー」
海兵B「どうしたんだ? いきなり」
海兵A「・・・ちょっと、変な噂を聞いて」

海兵B「彼が海賊になったという話か」
（海兵B座る）
海兵B「彼に限ってとは、思うが・・・」
海兵A「で・・・ですよね！」
海兵A「・・・もし」
海兵A「事実だとしてもー・・・」
海兵A「きっと、深い事情があるんですっ！」
海兵A「そうに決まっていますっ！！」
海兵B「・・・ああ、きっと」
（海軍大佐、舞台へ）
海軍大佐「なんの話をしているんだ？」
（海兵A、海兵B、立ち上がる）
海兵A「大佐！」
海兵B「お戻りになられたのですね」
（海軍大佐、舞台中央へ）
海軍大佐「ああ、今さっきな」
海軍大佐「本部から連絡があった」
海軍B「本部から？」
海軍大佐「ああ」
海軍大佐「このカバリア島に海賊が入り込んだらしい」
海兵A「じゃあ、あの噂は・・・」
海兵B「事実みたいだな」
海軍大佐「各自、警戒態勢を取ってくれ」
海兵A「はっ！」
海兵B「了解しましたっ！」
（海兵A、海兵B、舞台から退場）
海軍大佐「・・・」
海軍大佐「・・・海賊、か」
（海軍大佐、舞台からはける）

シーン4・カバリア島（昼）

（船長、副船長、航海士、舞台へ）
船長「ふむ・・・」
船長「参加申請はこれで完了のようだね・・・」
航海士「次はパシリか？たリーなあ・・・」
副船長「おや、気の短いことで」
航海士「ああ？俺のどこが気が短けえってんだ！」（ブレイブハート）
副船長「あなたですよ、ティフォン・Fくん」
航海士「んのヤロ・・・いつかマジで殺す・・・」
（船長、ブルーペンギンを装備して歩き回る）
船長「・・・うーむ」
航海士「って船長！何してんだよ！？」
船長「どうやら、ついてきてしまったらしい・・・」
副船長「・・・刷り込みというやつですか？」
航海士「なんだそれ？」
副船長「獣の赤ん坊が、生まれてはじめて見たものを、」
副船長「母親と誤認する習性ですよ」
副船長「あなた、航海士のくせに相変わらず無学ですね」
航海士「やかましい！！！」（/angry）
航海士「ドコの世界にペンギン連れた海賊が・・・」
船長「・・・困ったねえ」（笑いエモ）
航海士「・・・ほんとか？アンタ本当に困ってんのか？」
船長「でも、見捨てるのは忍びないよ」
副船長「相変わらず、船長はお優しいことで」
船長「ここにいる間だけでも・・・」

船長「・・・おいで、フランシス」（ペット装備をはずす）
航海士「いつのまに名づけてんだよ!!!」
副船長「相変わらず、ツッコミに忙しいことで」
航海士「だからお前は黙ってるっ!」（雷エモ）
航海士「だいたいっ!」
航海士「こんな怪しい野郎がなんで副船長なんだ!？」
船長「僕が任命したから。」
航海士「マジレスすなっつうかそういう問題じゃねえ!」
航海士「第一、この間まで海軍にいたような奴・・・」
航海士「いつ裏切るか、わかったもんじゃねえ!」（/angry）
副船長「・・・」
船長「・・・ティフォン・・・」
（船長、航海士のそばへ）
船長「大丈夫だよ」
船長「彼は、そんなことをする人間じゃないさ」
副船長「・・・船長・・・」
航海士「・・・くそっ!」（そっぽを向く）
船長「???」
副船長「嫉妬ですね」
航海士「な!？」（がーんエモ）
副船長「彼はあなたが船長になる前から、船にいたとか」
船長「ああ、幼馴染みのようなものかな」
船長「先代の実子じゃない僕が船長になると決まって」
船長「唯一、反対しなかったのがティフォンだった」
航海士「・・・」
副船長「それをさしおいて、ぼっと出の私が副船長になり、」
副船長「あなたに信頼されているのが気に入らない・・・」
副船長「そんなところでしょう?」
航海士「・・・この、」

（海兵A、海兵B、舞台へ）
海兵B「そこの3人!動くなっ!!!」
副船長「!？」
航海士「さっそく海兵のお出ましか!」
（航海士、続いて副船長、船長を庇うように前へ出て、武器を装備）
航海士「ヴィデット!行くぜ!」（炎エモ・/ki）
副船長「私に命令できるのは船長だけです!」（炎エモ・/ki）
海兵B「!？」
海兵A「『ヴィデット』・・・!？」
副船長「・・・!」
（海兵A、副船長に一步近寄る）
海兵A「間違いありません・・・」
海兵B「海軍にその人ありと謳われた、」
海兵B「ヴィデット准将・・・」
海兵B「貴方が・・・なぜ海賊と一緒に・・・」
副船長「さあ・・・人違いでは?」
海兵A「まさか・・・本当に海賊に・・・」
海兵A「う、嘘ですよ!」
海兵A「きっと、家族を人質にとられてるとか、」
海兵A「深いわけがあるんですよ!？」
副船長「風の噂ですが・・・」
副船長「雷迅の将と呼ばれた方は、死んだそうですね」
副船長「私は・・・ただの無法者ですよ、ふいふ」
海兵B「れおら、とにかく今は海賊の討伐と」
海兵B「彼の保護だ」
海兵A「は、はい・・・!」
航海士「保護・・・」

航海士「天然記念物かなんかか、お前は」
副船長「どうでしょうね・・・」
副船長「行きますよ！」(/ki)
航海士「俺に命令できんのは船長だけだぜ！」(/ki)
(副船長は海兵Aに、航海士は海兵Bに向かっていく)
船長「待て！ここで戦うのは得策じゃ・・・」
(既に戦闘中)
船長「く・・・」
海兵B「・・・ヴィデット准将、本当に海賊になってしまったのか・・・」
航海士「・・・あ、うしろ」
海兵B「！何だあれは！？」
(航海士、海兵Bに背中を向ける。海兵B、ランダムショットを使う)
航海士「ぐあっ！！」
(航海士、倒れる)
海兵B「その手は食わないぞ！」
航海士「ち・・・」(半身起こす)
副船長「何をやって・・・くっ！」(倒れこむ)
海兵A「・・・グレールさん！」
(海兵B、再びランダムショット)
船長「！！！」
(船長、ハルコネックレスを投げ、倒れる)
副船長「船長・・・！！！」
航海士「紫葵・・・！！！」
(海兵AB、船長に駆け寄る。海兵B、船長を捕縛しようと)
海兵A「え・・・」(驚きエモ)
海兵B「・・・女性・・・？」(目が回るエモ)
海兵B「女性が・・・海賊の首領・・・??」
船長「・・・」
副船長「・・・あ・・・」(汗エモ)
航海士「・・・俺、しーらね」
(航海士、逃げつつハルコネックレスを拾いに行き、離れ座り込む)
(船長、ゆっくりと立ち上がる)
船長「　　だって・・・？」
海兵B「??？」
船長「『女』だから・・・何だって・・・？」(/angry・武器を装備)
海兵A「グレール・・・！」
(船長、スキルを使う)
海兵AB「「わあっ！！！」」
海兵A「なんなの、この技・・・」
航海士「・・・船長にアレは、禁句・・・」
海兵B「一旦退却するぞ！」
海兵A「ひゃ、ひゃいつ！」
(海兵AB、はける)

副船長「私たちも・・・」
船長「逃がすか！！！」(走って部隊端へ)
航海士「・・・誰が、ここで戦うのは得策じゃないって？」
副船長「・・・口は災いの元ですよ」
(船長、戻ってくる)
船長「・・・見失ったか・・・ごほっ」(座り込む)
副船長「戻りましょう。傷の手当てをしないと」
船長「・・・」
(海賊たち、舞台からはける)

シーン5・海軍詰め所（夕方～夜）

（海兵AB、座っている）

（海軍大佐、舞台へ）

海軍大佐「・・・派手にやられたな」

海兵B「大佐！？」

海兵A「・・・申し訳ありません・・・」

海軍大佐「・・・あれが、海賊か」

海軍大佐「しばらく、様子を見るところ」

海兵B「よろしいのですか？」

海軍大佐「構わん」

海軍大佐「彼らは、正式にこの島のゲームに参加しているようだ」

海軍大佐「我々の権限では、海賊の一味とはいえ」

海軍大佐「一般の参加者をつまみ出すことはできない」

海軍大佐「彼らが問題を起こせば・・・」

海軍大佐「そのときこそ、捕えればいい」

海兵AB「はっ」

（海兵A、海兵B、舞台からはける）

（海軍大佐、少しあたりを歩く）

海軍大佐「ヴィデット・・・」

海軍大佐「やっと私が階級を抜いたかと思えば」

海軍大佐「殉職で二階級特進とは・・・」

海軍大佐「相変わらず、卑怯な男だ」

（少し部隊中央前方へゆっくり歩き）

海軍大佐「・・・それにしても・・・」

（海軍大佐、ハルコンネックスを投げる）

海軍大佐「生きていた・・・か」

海軍大佐「しかし・・・皮肉なものだ」

海軍大佐「・・・」

（海軍大佐、ハルコンネックスを拾う）

海軍大佐「いまは、見守るしかないようだな・・・」

（海軍大佐、舞台中央前へ進み出て、座る）

海軍大佐「まこと、海の神は気紛れで困る・・・」

（海軍大佐、舞台からはける）

シーン6・エンディング（夕方～夜or夜明け調整）

（海賊ズ、舞台へ）

航海士「そいや船長、これ忘れんなよ」

（航海士、ハルコンネックスを投げる）

船長「あ・・・！」

（船長、ハルコンネックスを拾う）

航海士「コイツのおかげで助かったんだろ」

副船長「はて？変わったネックレスですね・・・」

船長「ああ、」

船長「・・・父の形見なんだ」

副船長「・・・先代船長の？」

船長「いや、先代の船に拾われる前に持っていたものでね」

船長「顔も覚えていないけど、生き別れた父がくれたものなんだ」

副船長「（・・・見覚えがあるような・・・）」

副船長「（気の所為・・・か？）」

船長「これを持っていれば・・・」

船長「いつか、父に逢えるような気がして・・・」

副船長・航海士「「・・・」」
船長「・・・それより、」（二人へ向き直る）
船長「ヴィデット・・・本当によかったのか？」
船長「彼らは・・・昔の仲間なのだろう？」
副船長「・・・やれやれ、困った人だ」
（船長、？エモ）
副船長「私がこの船にいる理由が、まだおわかりでないとは」
副船長「・・・同じですよ、彼と」
航海士「！！！」（一歩、副船長の方へ）
（船長、さらに？エモ）
船長「ティフォン、どういうことだ??」
航海士「や、あの、それは・・・」
副船長「・・・船長、いえ、紫葵さん」
（副船長、船長のそばへ歩み寄る）
副船長「受け取って・・・いただけますか？」
（副船長、ダイヤの指輪を投げる）
（航海士、がーんエモ）
船長「ヴィデット・・・」
（船長、ダイヤの指輪を受け取る）
副船長「・・・」
航海士「な、な、なななな」
船長「誕生日でもないのに、どうして??」
（船長、？エモ、副船長・航海士、座り込む）
副船長「・・・・・・・・」
航海士「・・・・・・・・ぶっ」
航海士「だはははははは！船長らしいや！！」
副船長「・・・いえ、いいですもう・・・」
（副船長、隅っこで寝て泣きエモ、航海士、その周りをぐるぐる）
（副船長・航海士、はける）
（船長、ひたすら？エモのあと、はける）

（語り、舞台へ）

語り「こうして、彼らのカバリア島での冒険が始まりました」
語り「各地で暴れまわる彼らを見かけても」
語り「どうぞ、生あたたかく見守ってあげてください」
語り「これにて、」
語り「『パイレーツ・オブ・カバリアン-Violet-』」
語り「終演となります」}
語り「ご清聴、ありがとうございました！」

（以下キャスト紹介）

後日裏話など追加。